

愛媛果研ニュース

No.31 平成25年11月



収穫時期のキウイフルーツ「ヘイワード」

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。」鴨長明の随筆「方丈記」の冒頭の一説です。我々を取り巻く環境は、常に変化しています。短い期間であれば感じ難いものも、長い時間を経ると大きく変化していると気づくことが多いのではないのでしょうか。しかし最近では変化の度合いが大きいかつ早くなっているようです。果樹研究センターのほ場には樹齢30年を超える品種もありますが、多くは改植や高接ぎにより徐々に新しい品種に更新され新たな試験研究に使われています。また、ほ場にはイノシシ被害防止のための電気柵を設置しなければならなくなりました。10年前には考えられないことでした。

果樹生産は、栽培指針等をもとに、施肥、防除、収穫等、基本的には毎年同じような作業が繰り返されます。しかし個々の作業をみれば、天候、樹齢、病害虫の発生状況、使用する肥料・農薬・資材・器具、手法等の違いにより毎年すべて同じではないと思います。一方、消費者は毎年一定品質の果実の安定生産・安定供給を求めます。このようなニーズに応えるために、生産現場では工夫を重ね、新技術を導入するなど様々な努力がされています。

果樹研究センターでは、品種の育成、栽培や流通・加工に関する技術の開発、新しい病害虫の防除技術の開発等、新たな視点、新たな手法により試験研究に取り組んでおります。このような中で、今回は、近年問題となっている病害について①国や大学、他県の試験研究機関との共同研究による「キウイフルーツ根腐病に強い新しい台木開発試験」及び②新病害を対象とした「キウイフルーツすす班病の発生と防除対策」、今年品種登録された品種の健全種苗の育成について③「ユズ新品種‘鬼北の香里’の特性及びウイルスフリー化」の三つの研究成果をご紹介します。これらの成果が農家の経営改善の一助となれば幸いです。